

ヒロシマ・ナガサキを語り継ぐ、NIE に

広島で被爆して亡くなった 10 数万人の中に、新劇移動演劇団「桜隊」の団員たちがいる。女優の一人、仲みどりさんは東京の実家まで逃げのびたが、病状が悪化し、8月24日、東大病院で36年の生涯を閉じた。診察したのは、兵庫県姫路市出身の都築正男博士で、「原子爆弾症」と医学的に診断された世界で最初の患者といわれる。

仲さんの遺体は研究のために解剖された。10数年前、広島大原爆放射線医学研究所で、仲さんの胃の標本を見たことがある。米国が持ち帰っていたが、1973年、ようやく返還された2万点以上の原爆資料の中から見つかった。

愛徳学園の中3生による「ヒロシマ」の授業をオンラインで視聴しながら、広島大を訪れた夏の日を思い出していた。広島出身で、原水爆の怖さを映画で訴えた新藤兼人監督（故人）取材したのも、そのころだ。新藤監督は「悲惨な実情をくまなく後世に伝えたい」と語っていた。

私は広島に親類がいた関係で、幼いころから原爆ドームや広島平和記念資料館をたびたび訪れた。「平和な社会」を思って、新聞記者を目指すようになった原点の一つは、広島にあったように思う。都築博士の存在を知るのは、神戸新聞社に入社して2、3年後のことだ。

戦争を知らない中学生が、戦争の記憶を小学生に易しく語り継ぐ——。感銘を受ける授業だった。担当した先生の寄稿に、こうある。「生徒に、平和学習の受け手に終わらず、主体的に発信する側の立場になってもらうのが、取り組みのねらい」と。被爆から76年——。被爆体験の継承は急を要する課題であり、コロナ禍が平和学習の活動を鈍らせているのも心配だ。修学旅行で広島を訪れた各地の生徒たちが、「発信する側」になってくれたら、こんなに心強いことはない。

大国は核を手放さない。国の被爆者救済は今なお不十分だ。ヒロシマ・ナガサキを語り継ぎ、「世界終末時計」の針を戻すのは、ジャーナリズムの使命の最も大切なものの一つである。NIE 活動もその一環でありたい、と強く思う。（事務局長・三好）